

5-3-1 高山祭屋台の彫刻の原点・立川和四郎彫刻

<立川和四郎の「五台山」の獅子彫刻>

春の高山祭の屋台「五台山」の獅子彫刻は、長野県諏訪（下諏訪町、諏訪市）の立川和四郎（たてかわわしろう）が彫った。天保8（1837）年、与鹿16歳の時である。組内では祭礼の日まで制作を秘密にしている、高山の人は新しい彫り物を見て仰天したという。谷口与鹿は和四郎の躍動する獅子彫刻を見て、強く影響を受け、その後、高山祭屋台の名彫刻を数々生み出すことになる。

諏訪の和四郎は長野、愛知、静岡で寺社建築彫刻に活躍した大工で立川富昌（とみまさ）と言った。初代立川和四郎（富棟）は江戸の立川流に学び、諏訪に帰って諏訪大社などの建築彫刻に腕を振っている。富昌はその後を継いだ二代目で、初代は獅子、龍などをテーマにしていたが、富昌は鳥や植物にテーマを広げた。

天保時代の高山は、屋台が大体今日のような様式に改造された時代でもあり、各屋台組では次々に競うように改修が行なわれている。従って高山の工匠たちは、腕を振るって存分の仕事をするのができ、屋台建造の名工が求められた時代であった。

<谷口与鹿の屋台彫刻>

飛騨の名工、谷口与鹿（よろく）が25歳の時に手がけた秀作に、麒麟台（春の高山祭屋台）の彫刻「唐子群遊」がよく知られている。である。与鹿はこれを彫るとき、組内の有力者の家にこもって構想を練り、毎日、城山へ子どもと一緒に遊びに出かけ、その姿と動作を観察した。その間、少しも仕事に取りかかる気配がなかったため、組内（くみうち）の人は気をもんだという。

この柱間（はしらま）の彫刻は1枚のケヤキ板から、水を飲む鶴、動く鎖を付けた犬、籠の中の鶏、遊ぶ唐子などを彫り出した。近寄ってよく見ると、ケヤキの木目が非常にきれいである。木目の年輪の円形になるところを、ひざの頭辺りに持ってきたり、顔の頬にも木目の円が来るように工夫している。選りすぐった木目をこよなく愛した飛騨匠（ひだのたくみ）ならではの所業である。

また、籠の中の鶏はくりぬき彫りという手法で、耳かきのような特殊な刃物によって、多くの時間を費やして彫ったものである。彫った籠をかぶせたのではなく、どうやればこんな彫りができるものかと感心する。細かく均一に籠の網目を細く彫り抜き、中で鶏が餌をついばもうとしている。ケヤキの良材の木目を生かした名彫刻である。

与鹿は代々大工の家筋であった谷口家の中で、五兵衛延壽（のぶとし）の次男（郷土史研究者池之端甚衛の説では、孫という）として、文政5（1822）年に生まれ、幼名を与三次郎といった。延壽と共に、高山市西之一色町の飛騨東照宮の造営に従事し、その彫刻を担当した中川吉兵衛の教えを受けた。そして谷口一門が請け負った屋台の改修に、吉兵衛とともに腕を振るってゆくのである。

また、与鹿は、19歳の時には琴高台の波間の鯉を彫り、その後、恵比須台の手長・足長彫刻、麒麟台の彫刻などを完成したが、嘉永3（1850）年、文人画家の貫名海屋（ぬきなかいおく）を頼って京都に出てしまう。やがて伊丹の酒造家岡田家の食客となり、ここで家庭を持った。